

「エルサレム入城」

ヨハネの福音書 12:12~26

前回のメッセージで、イエシュアが過ぎ越しの祭りの六日前にベタニヤの村を訪れ、そこで晩餐に招かれたことをお伝えしました。そこにはイエシュア生き返らせたラザロがいて、またマルタとマリヤがいました。そこでマリヤが高価なナルドの香油をイエシュアの足に塗り、髪の毛で拭った出来事がありました。今日はその翌日に起こった出来事です。

1. 祭壇

12:12 その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、

12:13 しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」

いよいよイエシュアはエルサレムに入られます。その目的は十字架にかかって死ぬためですが、それを全く理解していない人々の様子が描かれています。実にこの五日後にはこれらの人々がイエシュアに対して「十字架につけろ！」と叫ぶわけですから本当に不思議な光景です。

ここで人々が叫んでいる「ホサナ」(חַסְנָה)という言葉は「どうぞ救ってください」という意味のヘブル語です。この出来事は詩篇 118 篇の預言を指し示していると考えられます。

詩篇

118:25 ああ、主よ。どうぞ救ってください。ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。

118:26 主の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。

118:27 主は神であられ、私たちに光を与えられた。枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

この 118:27 に「光を与えられた」とありますが、イエシュアがエルサレムに来られたのは「その翌日」でした。前回の 12:1 のメッセージでイエシュアが過ぎ越しの祭りの「六日前」にベタニヤに来られたことを述べました。イエシュアは「その翌日」にエルサレムに来られたというわけですが、この「六日前」には創世記 1 章にあります天地創造の第一日目と関連性があることも述べました。天地創造の第一日目は神様が「光があれ」と言われ、光を現された日です。ですから「その翌日」というこの出来事の中にも、光についての言及があると考えられます。この光とはもちろんイエシュアを指し示していると考えられますが、それが「祭壇の角のところまで」行くことが記されています。祭壇はいけにえをささげる場所、祭壇の角はその血をふりかける部分です。ここにもイスラエルの罪のためのいけにえとして死なれるイエシュアが表されていると考えられます。

2. なつめやし

また「しゅろ」、なつめやしとも呼ばれるその木の枝を持って、この時エルサレムにいた人々はイエシュアを出迎えました。この「しゅろの木の枝」にどのような意味があるのでしょうか。たしかに詩篇 118:27「枝をもって」とありますが、なにゆえに「しゅろの木の枝」であったのでしょうか。しゅろ、すなわちなつめやしは植物学上では背が高く成長し(15~30m)、一度に多くの実をつけることから、昔から「繁栄、豊穡」の象徴とされてきました。また荒野のような過酷な環境下でも深く根を張り、強い生命力を発揮して育つため「phoenix 不死鳥」とも呼ばれています。私たちの日本で言うところの「松、竹、梅」にあたる、いわゆる縁起の良い植物と言えるわけですが、神様のご計画の視点からも考えてみたいと思います。

預言書、エゼキエル書の 40 章~43 章はエゼキエルが神様によって見せられた神殿の幻についての記述ですが、この神殿はイエシュアが地上再臨され、メシアの王国、千年王国の中で建てられる神殿と考えられています。この神殿の入り口から本殿、至聖所に至る道筋にこの「なつめやし」が登場します。

エゼキエル書

40:10 東のほうにある門の控え室は両側に三つずつあり、三つとも同じ寸法であった。壁柱も、両側とも、同じ寸法であった。

40:16 門の内側にある控え室と壁柱には格子窓が取り付けられ、玄関の間もそうであった。内側の回りには窓があり、壁柱には、なつめやしの木が彫刻してあった。

40:17 それから、彼は私を外庭に連れて行った。そこには部屋があり、庭の回りには石だたみが敷かれていた。石だたみの上に、三十の部屋があった。

40:22 その窓も玄関の間もなつめやしの木の彫刻も、東向きの門と同じ寸法であった。七段の階段を上って行くと、その先に玄関の間があった。

40:24 次に、彼は私を南のほうへ連れて行った。すると、そこにも南向きの門があり、その壁柱と玄関の間を彼が測ると、それは、ほかの門と同じ寸法であった。

40:26 そこに上るのに七段の階段があり、その先に玄関の間があった。その両側の壁柱には、なつめやしの木が彫刻してあった。

40:28 彼が私を南の門から内庭に連れて行き、南の門を測ると、ほかの門と同じ寸法であった。

40:29 その控え室も壁柱も玄関の間もほかのと同じ寸法で、壁柱と玄関の間の周囲に窓があった。門の長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトであった。

40:30 玄関の間の周囲は長さ二十五キュビト、幅五キュビトであった。

40:31 その玄関の間は外庭に面し、その壁柱にはなつめやしの木が彫刻してあった。その階段は八段であった。

40:32 次に、彼は私を内庭の東のほうに連れて行った。その門を測ると、ほかの門と同じ寸法であった。

40:34 その玄関の間は外庭に面し、両側の壁柱にはなつめやしの木が彫刻してあった。階段は八段であった。

40:35 彼は私を北の門に連れて行った。それを測ると、ほかの門と同じ寸法であった。

40:37 その玄関の間は外庭に面し、両側の壁柱にはなつめやしの木が彫刻してあった。階段は八段であった。

41:1 彼は私を本堂へ連れて行った。その壁柱を測ると、その幅は両側とも六キュビトであった。これが壁柱の幅であった。

41:4 彼はまた、本堂に面して長さ二十キュビト、幅二十キュビトを測って、私に「これが至聖所だ」と言った。

41:17 入口の上部にも、神殿の内側にも外側にも、これを囲むすべての壁の内側にも外側にも彫刻がしてあり、

41:18 ケルビムと、なつめやしの木とが彫刻してあった。なつめやしの木はケルブとケルブとの間にあり、おのおのケルブには二つの顔があった。

41:19 人間の顔は一方のなつめやしの木に向かい、若い獅子の顔は他方のなつめやしの木に向かい、このように、神殿全体の回りに彫刻してあった。

41:20 床から入口の上まで、本堂の壁にケルビムとなつめやしの木が彫刻してあった。

41:25 本堂のとびらには、壁に彫刻されていたのと同じようなケルビムとなつめやしの木が彫刻してあった。外側の玄関の間の前には木のひさしがあった。

41:26 玄関の間の両わきの壁には格子窓となつめやしの木があり、神殿の階段式の脇間とひさしも同様であった。

このように、神殿全体の回りになつめやしの木が彫刻されていました。つまりこのしゅろ、なつめやしの木は御国の神殿を指し示し、そこにお迎えするメシアとしてのイエシュアを表していたと考えられます。

またしゅろ、なつめやしはヘブル語でターマール(תְּמָרָה)と言いますが、これが聖書で最初に登場するのが創世記の38章で、一人の女性の名として登場します。

創世記

38:1 そのころのことであった。ユダは兄弟たちから離れて下って行き、その名をヒラというアドラム人の近くで天幕を張った。

38:2 そこでユダは、あるカナン人で、その名をシュアという人の娘を見そめ、彼女をめとって彼女のところに入った。

38:3 彼女はみごもり、男の子を産んだ。彼はその子をエルと名づけた。

38:4 彼女はまたみごもって、男の子を産み、その子をオナンと名づけた。

38:5 彼女はさらにまた男の子を産み、その子をシェラと名づけた。彼女がシェラを産んだとき、彼はケジブにいた。

38:6 ユダは、その長子エルにタマルという妻を迎えた。

38:7 しかしユダの長子エルは主を怒らせていたので、主は彼を殺した。

38:8 それでユダはオナンに言った。「あなたは兄嫁のところに入り、義弟としての務めを果たしなさい。そしてあなたの兄のために子孫を起こすようにしなさい。」

38:9 しかしオナンは、その生まれる子が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないために、兄嫁のところに入ると、地に流していた。

38:10 彼のしたことは主を怒らせたので、主は彼をも殺した。

38:11 そこでユダは、嫁のタマルに、「わが子シエラが成人するまで、あなたの父の家でやもめのままでいなさい」と言った。それはシエラもまた、兄たちのように死ぬといけなかったからである。タマルは父の家に行き、そこに住むようになった。

38:12 かなり日がたって、シユアの娘であったユダの妻が死んだ。その喪が明けたとき、ユダは、羊の群れの毛を切るために、その友人でアドラム人のヒラといっしょに、ティムナへ上って行った。

38:13 そのとき、タマルに、「ご覧。あなたのしゅうとが羊の毛を切るためにティムナに上って来ていますよ」と告げる者があった。

38:14 それでタマルは、やもめの服を脱ぎ、ベールをかぶり、着替えをして、ティムナへの道にあるエナイムの入口にすわっていた。それはシエラが成人したのに、自分がその妻にされないのを知っていたからである。

38:15 ユダは、彼女を見たとき、彼女が顔をおおっていたので遊女だと思い、

38:16 道ばたの彼女のところに行き、「さあ、あなたのところに入ろう」と言った。彼はその女が自分の嫁だとは知らなかったからである。彼女は、「私のところにお入りになれば、何を私に下さいますか」と言った。

38:17 彼が、「群れの中から子やぎを送ろう」と言うと、彼女は、「それを送ってくださるまで、何かおしるしを下されば」と言った。

38:18 それで彼が、「しるしとして何をあげようか」と言うと、「あなたの印形とひもと、あなたが手にしている杖」と答えた。そこで彼はそれを与えて、彼女のところに入った。こうしてタマルは彼によってみごもった。

このように、かなりの紆余曲折はありましたが、タマル（ターマール）はユダ、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの子、イスラエル 12 部族のユダ族の祖から子孫を残します。そしてこの直系の子孫がダビデに繋がっていきます。そのことがマタイの福音書の冒頭にはっきりと記されています。

マタイ

1:1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。

1:2 アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、

1:3 ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、

1:4 アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、

1:5 サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、

1:6 エッサイにダビデ王が生まれた。

このようにターマール、しゅろの木の枝にはユダ族の子孫、そしてダビデ王の家系を示す意味があると考えられます。つまりイエシュアをダビデの子、イスラエルの正当な王位継承者であることが表されていると考えられます。

3. 子ろば

12:14 イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりであった。

12:15 「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」

12:16 初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。

そしてイエシュアは「子ろば」に乗ってエルサレムに入られました。これも預言の成就です。ゼカリヤ書 9章にこう記されています。

ゼカリヤ

9:9 シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。

9:10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。

9:11 あなたについても、あなたとの契約の血によって、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き放つ。

9:12 望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。

9:13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。

このように、イエシュアが「諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。」全世界をすべ治めるお方であることが「子ろば」に乗られる行為に示されているのです。また「子ろば」はヘブル語でアイル(אֵיל)と言いますが、ウール(וּל)「目をさます、起こす、奮い立たせる」という動詞が語源になっています。先ほどのゼカリヤ 9:9 に続く 9:13 にも「シオンよ。わたしはあなたの子らをウール、奮い立たせる」と記されており、「子ろば」がイスラエルを再興させる王としてのしるしとも言えます。

またこのウールと同じ綴りであるにもかかわらずアーヴァル(אָוּר)「盲目にする」という全く逆の意味をもった動詞があり、これとの関連性も考えられます。すなわち聖書の専門家であるユダヤ人の指導者である祭司やパリサイ人たちが神の御子メシアであるイエシュアを信じることができない、受け入れることができないのは、彼らが「盲目」であるがゆえ、「盲目にされた」がゆえであるからです。そのこともまたイエシュアが「子ろば」に乗って来られた理由の一つだと考えられます。そしてその盲目さのゆえにイエシュアは十字架にかけられるのです。ですからこの「子ろば」アイルが示すアーヴァル「盲目にする」という事実は非常に重要です。なぜならユダヤ人たちは神様が憎くて、そのご計画を拒絶してイエシュアを十字架にかけて殺したのではないからです。自分を神と等しくして神を冒瀆する者、安息日の規定を守らず、律法に逆らう者としてのイエシュアを殺すのです。つまりユダヤ人たちの神様に対する熱心さのゆえにイエシュアは殺されるのです。それだけ彼らユダヤ人たちは神様に対して熱心であったのです。かつては偶像礼拝に走り、バビロン捕囚という屈辱的

な結果を自ら招いた彼らでしたが、その捕囚から帰還した後の彼らの歴史は、神様に対する信仰を守るために、多くの迫害や圧政にも屈服することなく命がけで戦い抜くことによって築き上げられていました。この当時もローマ帝国の支配下にありましたが、ローマは彼らの領土は奪えても、彼らの信仰を奪うことはできませんでした。そんな彼らの手によって殺されるためには、イエシュアについて神様のご計画について、聖書の解釈について誤解させることすなわち「盲目にする」こと以外になかったのです。もし彼らユダヤ人たちが盲目にされなかったら、待ち望んだ神様の御子メシアであるお方を殺すことなど考えもしなかったでしょう。逆に全イスラエルがイエシュアに付き従ったことでしょう。しかしイエシュアはそのイスラエルの罪のためのいけにえとして殺される必要がありました。そうでなければ誰も神様の御国に入ることができないからです。ですからこの「子ろば」が示す「盲目にする」という真理は非常に重要です。

ちなみにこの「子ろば」アイルと全く同じ綴りでイール(אֵיִל)という言葉があります。これは「町、都」を意味する名詞で、創世記 4:17 で初めて使われています。

創世記

4:17 カインはその妻を知った。彼女はみごもり、エノクを産んだ。カインは町を建てていたので、自分の子の名にちなんで、その町にエノクという名をつけた。

アダムの子カインは、自分の息子と自分が建てた町、イールを同じ名前にしました。つまりイールには「自分の息子、自分の町」という概念があり、神様の「息子」である御子イエシュアが来られたエルサレムは「ご自分の町」として神様が選ばれた町ですから、「子ろば」アイルがこの「町、都」を意味するイールと同じであることにも意味があると考えられます。

4. 何一つうまくいかない

12:17 イエスがラザロを墓から呼び出し、死人の中からよみがえらせたときにイエスといっしょにいた大ぜいの人々は、そのことのあかしをした。

12:18 そのために群衆もイエスを出迎えた。イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからである。

12:19 そこで、パリサイ人たちは互いに言った。「どうしたのだ。何一つうまくいっていない。見なさい。世はあげてあの人のあとについて行ってしまった。」

ここにも一つの型が表されていると考えられます。ここでも再びラザロが生き返らされたことが記されていますが、これがイエシュアが地上再臨した際に呼び集められるイスラエル、ユダヤ人を指し示していると以前のべました。そのことが先ほどの 12:13 の出来事にも表されています

ヨハネ

12:13 しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」

「世はあげて」つまり全イスラエル、すべてのユダヤ人とそれに繋がる者たちがイエシュアを呼び求め、イエシュアの呼びかけに応える、これが終わりの日に起こる、神様のご計画の成就を示す出来事です。そしてその

日その時、神様から出たものでない計画、悪魔の策略が「何一つうまくいかない」、すべて失敗に終わることがここに表されていると考えられます。

5. ギリシャ人

12:20 さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシャ人が幾人かいた。

「ギリシャ」はヘブル語でヤーワーン(יָוָן)と言い、先ほどのゼカリヤ書 9 章の預言ではイスラエルと相反する勢力、すなわち異邦人の代表的存在として挙げられています。その異邦人の代表のような彼らギリシャ人の幾人かが、イスラエルの祭である過ぎ越しの祭にやって来て、しかもイエシュアにお会いしたいと言うのです。ここに描かれているのは、イスラエルの神様を信じ、イエシュアを信じた異邦人の教会、クリスチャンの型だと考えられます。ちなみにヤーワーン(יָוָן)という名詞は男性名詞なのですが、ヘブル語には男性形と女性形の言葉があり、たとえば「男」を意味するイーシュ(אִישׁ)の語尾にヘー(ה)というヘブル文字をつけると「女」イッシャー(אִשָּׁה)となるといった具合に男性形の語尾にヘー(ה)をつけると女性形になります。そしてこのヤーワーン(יָוָן)の語尾にヘー(ה)をつけて女性形にするとヨーナー(יְוָנָה)となり、これは「はと」という意味になります。「はと」は牛や羊と並び、神様に捧げられる、受け入れられる動物です。

レビ記

5:6 自分が犯した罪のために、償いとして、羊の群れの子羊でも、やぎでも、雌一頭を、主のもとに連れて来て、罪のためのいけにえとしなさい。祭司はその人のために、その人の罪の贖いをしなさい。

5:7 しかし、もし彼に羊を買う余裕がなければ、自分が犯した罪の償いとして、山鳩二羽あるいは家鳩のひな二羽を主のところを持って来なさい。一羽は罪のためのいけにえ、他の一羽は全焼のいけにえとする。

このように、異邦人も女性形、イエシュアの「花嫁」となるならば、雅歌に記されるように、花婿なるイエシュアに愛され、御父である神様に受け入れられるということが言えます。

雅歌

2:14 岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。私に、顔を見せておくれ。あなたの声を聞かせておくれ。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。

6. 来なさい

12:21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。

12:22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。

この記述は状況説明としては、一見わざわざ書かなくても、省略しても良いと思えるような部分です。つまり状況説明だけで良いなら「いく人かのギリシャ人がイエスに会いに来た」とまとめることができたはずですが。しかしこのヨハネの福音書の筆者はそれをせず、重要な情報としてこの出来事を順序正しく詳細に記しています。なぜならこの出来事を受けてイエシュアが「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」とまで宣言して

おられるからです。ここにどんな意味が隠されているのかを考えてみたいと思います。

まずガリラヤのベツサイダの人ピリポ、そしてアンデレについて考えます。この二人がヨハネの福音書で最初に登場する場面を見てみたいと思います。

ヨハネ

1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。

1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟 **アンデレ** であった。

1:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、 **ピリポ** を見つけて「わたしに従って **来なさい**」と言われた。

1:44 **ピリポ** は、ベツサイダ の人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。

この場面はイエシュアがバプテスマのヨハネからバプテスマを受けて後、公の生涯の初めに弟子を召し出す場面です。イエシュアの弟子は12人ですが、このヨハネの福音書では、イエシュアから直接「来なさい」と言われた人で、はっきりと名前が分かっているのはこのアンデレとピリポだけです。つまりこの二人に共通するキーワードは「来なさい」という「イエシュアの直接的な呼びかけ」です。そしてその後アンデレはシモン・ペテロを、そしてピリポはナタナエルをそれぞれイエシュアのもとに連れて来て、これら4人全員がイエシュアの弟子になります。イスラエルの神様を信じ、イエシュアを受け入れた、いく人かのギリシャ人たちがこのアンデレとピリポに出会った、彼らによってイエシュアのもとに連れて来られたというこの出来事は、異邦人の教会、クリスチャンもまたイエシュアに直接的に呼ばれた存在、呼び集められた、選ばれた存在であり、イエシュアの弟子となることができるという意味だと考えられます。

7. その時

12:23 **すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」**

人の子、イエシュアが栄光を受ける時とは、イスラエル、ユダヤ人と異邦人の教会、クリスチャンがイエシュアによって呼び集められる時、すなわち地上再臨の時です。ピリポとアンデレによって連れて来られたギリシャ人たち、この出来事の中にそれが表されている、「その時」こそがイエシュアが栄光の王として御国を建て上げ、そして治める時であることを語られたと考えられます。

12:24 **まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。**

12:25 **自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。**

地に落ちて死ぬ一粒の麦、それは言うまでもなくイエシュアです。また「自分のいのちを憎む」ほどに神様を

愛し、全く忠実に従うお方、それはイエシュアただお一人です。私はそのような者であると、ピリポとアンデレを介して会いに来たギリシャ人たちに対してイエシュアは語っておられると考えられます。

12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。

かつてピリポとアンデレに言われたように、イエシュアに会いに来たギリシャ人たちにも「来なさい」とイエシュアは言われました。これは異邦人の教会、クリスチャンたちに対する呼びかけです。ここで「仕えるならば、仕える者」、仕えるという言葉が強調されています。ヘブル語でシャーラト(שררט)という動詞が使われています。この「仕える」ことを意味するシャーラトが聖書で最初に使われる箇所が創世記 39:4 です。

創世記

39:4 それでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。

これはエジプトに奴隷として売られていったヤコブの子ヨセフが、彼を買い取ったエジプト人ポティファルの家で受けた待遇について記されている箇所です。口語訳や新共同訳聖書では「身近に、そば近く仕え」と訳されていますがこの新改訳では「ことのほか愛され…」と訳されているのがシャーラトです。このように「仕える」と言っても私たちが一般的に捉えているしもべや奴隷とは大きく違うことが解ります。「主人の全財産が委ねられる存在」、つまり神様の全財産の管理を任されるほどの存在、何より「御そば近くでことのほか愛される」という待遇、それがイスラエル、ユダヤ人だけでなく、異邦人の教会、クリスチャンにも等しく与えられると考えられます。どうしてもイスラエル、ユダヤ人が強調される神様の御国ですが、このように待遇としては私たち異邦人も全く変わりません。ですから私たちも御国の到来を心から喜び待ち望むことができるのです。